

検証 14信州豪雪災害

3人死亡14人大けが／交通網一時まひ／最大6自治体で一時孤立

15日時点の県内の
主な積雪など

関東甲信や東北地方に大きな影響が出て、県内でも記録的となった今回の豪雪は、前線を伴った低気圧が急速に発達しながら日本の南を進んだため、15日の最深積雪が開田高原115cm、軽井沢99cm、飯田81cmといずれも観測史上最多を更新した。茅野市、諏訪郡富士見町、北佐久郡軽井沢町、御代田町の4市町には災害救助法が適用された。

豪雪 県内まとめ

22日時点の県のまとめによると、除雪作業中の事故などで諏訪郡原村と上田市の女性各1人と長野市の男性の計3人が死亡、10市町村の14人が大けがを負った。一時は県内の交通網がほぼまひし、物流の停滞などで県民の暮らしに深刻な影響が出た。

中央道、上信越道、長野道、中部横断道は一時、ほぼ全区間が通行止めになった。軽井沢町300人が往来できなくなった。

鉄道は、長野新幹線が15日に終日運休し、16日は始発から運転を再開したものところから夕方まで再び上下線とも運行をストップ。JR中央西線は特急しなのなどが16日まで、飯田線は特急伊那路が17日までそれぞれ運休。小淵沢駅（山梨県北杜市）で除雪作業に使っていた機関車が脱線するなどした影響で、JR中央東線の特急の運休は長期化。あずさ、スーパーあずさの再開は19日夜だった。

県は15、16日、多数の車両が足止めとなった軽井沢町の浅間サンライン（県道小淵沢軽井沢線）や佐久市で孤立した集落の除雪作業のため、自衛隊に災害派遣を要請した。

雪の重みで多くの農業用ハイハウスなど農業生産施設が損壊。22日時点の県のまとめでは64市町村の計5239棟に上り、今後の調査でさらに増える見込みだ。一方、県教育委員会によると、17日には県内公立小中学校の休校が163校に上り、学校にも大きな影響が出た。

ルート・速度・寒気降雪要因

県内の交通機関などをまひさせた大雪はなぜもたらされたのか。その要因は「南岸低気圧」が関東甲信地方に沿って、ゆっくりと移動したことにある。

南岸低気圧は東シナ海周辺で発生し、通常は日本の南を西から東に進みながら、ルート次第では県内に重く湿った雪を降らせる。県内では「カミ雪」と称される雪だ。

今回は日本の東海上を北に大きく蛇行した偏西風が、南岸低気圧を日本に近づけて県内に大雪を降らせるルートをとった上に、日本の東海上に発達した「アロッキング高気圧」が南岸低気圧の進行を遅らせ、8日と14、15日に関東甲信地方に大雪を降らせた。特に14、15日は南岸低気圧の速度が遅かった。長野地方の速度が遅かった。長野地方の速度が遅かった。長野地方の速度が遅かった。

名古屋大学地球水循環研究センターの上田博教授（64）は「気象学Ⅱによると、地上の気温が氷点下では降水現象が雪になり、0～5度では雨か雪、5度以上ならは雨になる。長野地方気象台は当初、15日の軽井沢の気温を高く予想

寒気を運び、アロッキング高気圧からは暖かく湿った空気が日本付近に流れ込んだ。この寒暖差が、南岸低気圧を急速に発達させた。

上田教授は「現在の技術レベルでは、気温などを正確に予測できず、雪になるか雨になるかを予測するのは簡単ではない。天気予報にはどうしても誤差が生じてしまう」と説明。民間気象会社のウェザーニューズ（千葉市）の担当者も、南岸低気圧に関係する予報は、低気圧のルートや急な発達、寒気の南下といった要素があり、「直前まで難しい」と打ち明ける。

長野県消防防災ヘリコプター「アルプス」は22日、記録的な豪雪となった山梨県からの要請を受けて出勤し、甲府市高成町の孤立集落から7世帯7人を救助した。午後0時半ごろに県営松本空港（松本市）を出発し、孤立していた住民を1人ずつ引き上げ、安全な場所へ搬送。同2時45分ごろに松本空港に戻った。

「南岸低気圧」注意が必要



今回の大雪はさまざまな気象条件が複合的に重なった珍しいケースとの見方もあるが、上田教授は「何年かに一度は南岸低気圧による大雪がある。今回が特別だったわけではない」とし、引き続き大雪に注意するよう求めている。

県内の防災ヘリが山梨で7人救助